

病弱児の教育は、院内学級、分教室、訪問教室など形はさまざまですが、病気療養中の子どもたちが治療を受け、病気と闘いながら学んでいます。

たくさんの不安を抱えている療養中の子どもたちにとって、勉強すること、学校や先生、友だちの存在はとても大きいものです。しかし、その教育条件や環境は十分とは言えず、教育の保障がされていない現実がたくさんあります。

特集では、病弱児教育の実践とともに、その場で学んできた子たちが思いを語り、病弱児教育の現状や課題を知る機会にしたいと思います。

◆子どもに戻す  
入院してきた子たちは、院内学級に行こうと言われると、はじめはだいたい嫌だと言います。だってベッドでまんがを読んでいたほうがいいし、身体もしんどいですしね。すすめられてようやく来てくれるようになります。一回来ると、いろんな体験ができて、「本当にここは学校？」と感じるようです。学級の楽しさを体験してもらって、また来たいと思ってもらうことがはじめのハードルです。学級を担当し始めたころは、スムーズに学校に復帰できたり、退院できたり、社会や学校に戻るお手伝いをするものだと思っていました。そのときは、「学習をする」という意識がたくさんありました。  
入院している子どもたちと過ごすなかで気がついたのは、ベッドの上にいる子どもたちは子どもでいる前に患者さんでいることを優先させられるという状況にあることです。病気を治す、医師や大人の言うことを聞くという状態を求められています。子どもは本来自

勉強のせい？ 先生である私のせい？ と思っただけで一生懸命に訪問するわけです。病気という理由になったときに、病気だったら仕方ないね、とほっとする自分がどこかにいることに気づきました。  
でも病気が治ったら学校に行けるわけではなく、病気のために学校に不応になつてくる子がいると知ったとき、自分の経験からなにかできるんじゃないかと思いました。そして、異動希望を出していまのさいかち学級（院内学級）にきました。

◆エネルギーをためる  
最初はスムーズに学校や社会復帰のためと思っていたのが、教育の一番の役割は、教育というツールを使って、患者さんであるこの子たちを子どもに戻すことで治療に向かうエネルギーをためることだと思ったのです。  
由であつたり、いろんな動きがあつたりします。でも入院中はそれをしないし、させてもらえない、行動や感情の自由が奪われていきます。悲しいと思つていても仕方ないでしょ、治療が痛いのも仕方ないじゃない、治りたいんですよ。一日も早く退院をしたいならそんなことを言わないの、と言われるんです。ごはんだって選べないし、治療が嫌だとも言えないから、選ぶことも拒否することもできず、自主性がなくなります。  
そんななかで生活していると、友だちとの関わりもなくなり、教育とも遠ざかつてしまします。なにかあつたときは、今日と同じ明日が本当に来るのだろうか、私たちはそんなこと普段は考えずに生きているのに、その子たちは考えるんですよ。  
こうした状況でいる子たちって子どもではないですよ。患者さんなんです。だから、学級に来たときは子どもに戻る、子どもに戻すのです。わがままを言っているし、やりたくないって言っているし。いろんなことを思ったり、なにかに挑戦したり、人と関わったり、笑ったり泣いたりなどの感情を自由にしたり。そういう場所を用意しています。そうすると、子どもに戻った瞬間にエネルギーがたまります。

## 《特集》

# 病弱児教育



## 《特別インタビュー》 副島賢和さん

## 生きるエネルギーを ためるために

◆病気のために不登校  
私は公立小学校の教員として働いていましたが、在職中に入院を3回ほど繰り返しました。そのときに出会った看護師さんに、「これから心理学が大切になるよ」と言われ、それから、学校にうまく適応できない子たちのケアを学びたいと思いました。  
そんなとき、学校に行けなくなつたきっかけを子どもに聞いた資料を見る機会がありました。その資料によるときっかけの多くは、友だち、学業などでしたが、15%くらいの子たちが病気のために行けなくなつたと答えていました。  
学校の先生ってこの子たちになにをしているのだろうと思いました。学校に行けなくなつた子どもがいたときに、友だちとの関係？